

京都大学	博士 (工学)	氏名	山本 裕敏
論文題目	認知症者の支援ニーズ把握と認知症ケアの質評価支援のための工学的的手法に関する研究		
<p>(論文内容の要旨)</p> <p>超高齢社会の我が国では認知症高齢者数が増加し続けており、認知症者の自立生活支援および認知症ケアの質を向上させることが社会の重要な課題である。近年では認知症に関する理解が進み、従来の薬物療法のような医療従事者側の観点に代わり、患者側の視点に立つパーソン・センタードなケアの有効性が認識されるようになってきた。本論文は、早期認知症者の工学的支援および施設における認知症ケアのそれぞれに対して、パーソン・センタードな視点を反映するための工学的的手法を提案し、認知症者本人とそのケア・ギバーである家族および提案システムのユーザとなるマッパーを対象とした実験によりそれらの有効性を評価したものであり、5章からなっている。</p> <p>第1章は序論であり、研究背景として、認知症者の工学的支援策および認知症ケアに関する従来研究の調査から二つの課題を抽出している。第一の課題は、早期認知症者の生活支援に向けた Assistive Technology 関連分野では、シーズが先行しており必ずしも真のニーズが考慮されていないことである。また、第二の課題は、観察評価手法である認知症ケアマッピング (DCM) の操作が煩雑であり、その実践が困難であることである。これらの課題を解決する方策を提案し、認知症者本人とそのケア・ギバーである家族および DCM 支援システムのユーザとなるマッパーを対象とした実験により、その有効性を検証することが本研究の目的であると述べている。さらに、本論文の構成を述べている。</p> <p>第2章では、早期認知症者が社会生活を維持する上で必要な支援ニーズを認知症者本人とそのケア・ギバーである家族が「困っていること」に着目し、無理なく自然に聞き出すための新たなインタビュー手法を提案した。本手法では、半構造化面接法を適用し、日常生活において支援を必要とする場面を絵として表現し、認知症者に提示する。そして、家族の観察情報と本人の困惑度の相違 (困惑度不一致) と、本人自身の困惑度と支援要求度の相違 (支援要求度不一致) の二つの不一致情報を活用することにより、有効な支援ニーズの抽出を試みる。本手法を施行した6事例中4事例から22件の支援ニーズを抽出した。抽出された支援ニーズには、従来研究では報告のない領域の支援ニーズも含まれており、複数当事者間での間主観性を抽出する本手法の有用性が示唆された。しかし、本人に病識がないあるいは病識を認めたくないと思う気持ち強い2事例からは従来法と異なる支援ニーズが得られず、提案手法の限界も示された。</p> <p>第3章では、認知症ケアマッピング (DCM) の実践を容易化するための情報通信技術 (ICT) を基盤とした支援システムを開発し、その有用性の評価手法を提案した。マッパー (観察評価者) がマッピング (観察・記録) 時に経験している困難や負担をアンケート法により調査して支援ニーズを把握した上で、支援システムに要求される機能を以下のごとく決定した。①マッパーがルールや時間を気にせず観察に集中できること (マッパーの負担軽減)。②マッピングが容易であること (容易性)。③再現性良く観察ができること (観察精度)。①～③にかかわる支援システムの信頼性と有用性を検証するために、認知症者のケアの様子を模擬するロールプレイ・ビデオを用いて評価させるプロトタイプシステムを構築して、従来の紙ベースの手法と比較する評価テストを行った。その結果、マッピングの容易性とマッパーの負担軽減に肯定的な結果が得られた。さらに、マッピングの精度に関してプロトタイプ支援システムは従来法と同等以上のレベルに達していることが示された。一方、実用化には注記の素早い入力や修正等が必要であり、多人数の認知症者を観察対象とする場合の同時マッピングには課題が残された。</p> <p>第4章では、開発した DCM 支援システムを実際のケア現場に適用するための実用性について議論している。第3章で述べたプロトタイプシステムを使ったマッパーをユーザとする実験で得られた意見を参考に、指摘された課題に対策を講じて DCM 支援システムを拡張した。</p>			

京都大学	博士 (工学)	氏名	山本 裕敏
------	---------	----	-------

認知症ケア現場での実マッピングはビデオマッピングとは異なり，場所/時間/利用者/スタッフ等に応じて状況は種々異なり，変化する．さらに，マッピングの結果に正解は存在しないので，第3章で用いたビデオマッピングによる評価のように比較の基準とする標準データを予め設定することができない．そこで，熟練のマッパーを厳選して，信頼性の高いマッピングデータを従来法および支援システムを用いて取得し，それらの情報をIRR(評価者間信頼性)一致率を用いて比較することにより評価した．その結果，一部条件付きではあるが，DCMでケアの評価目的として用いることに要求される条件(2名のマッパーの一致率が70%以上)を達成できたことで，提案した支援システムの実用性が示された．

第5章は結論であり，本論文のまとめと，今後の課題と展開を述べている．

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、早期認知症者が真に望む支援ニーズを把握する手法および、実践が困難な認知症ケアマッピング(DCM)手法を容易化するICTベースの支援システムを開発し、認知症者本人とそのケア・ギバーである家族およびDCM支援システムのユーザとなるマッパーを対象とした実験によりそれらの有効性を評価したものであり、主な成果は以下の通りである。

1. 早期認知症者が社会生活を維持する上で必要な支援ニーズを認知症者本人とそのケア・ギバーである家族が「困っていること」に着目し、無理なく自然に聞き出すための新たなインタビュー手法を提案した。本手法では、家族の観察情報、困惑度不一致と支援要求度不一致の情報を活用することにより、有効な支援ニーズの抽出を可能とした。本手法を施行した6事例中4事例から22件の支援ニーズを抽出した。抽出された支援ニーズには、従来研究では報告のない領域の支援ニーズも含まれており、複数当事者間での間主観性を抽出する本手法の有用性が示唆された。しかし、本人に病識がないあるいは病識を認めたくないと思う気持ち強い2事例からは従来法と異なる支援ニーズが得られず、提案手法の限界も示された。
2. DCMは施設入居の認知症高齢者に質の高いケアを提供するために有効な観察評価手法であるが、複雑さに加えて紙ベースであるために実施するにはマッパー(観察評価者)に高い能力とスキルが要求される。マッパーがマッピング(観察・記録)時に経験している困難や負担をアンケート法により調査して、支援システムに要求される機能を決定し、ICTベースのDCM支援システムを開発した。ロールプレイ・ビデオを用いて評価させるプロトタイプシステムを構築して支援システムを評価した結果、マッピングの容易性とマッパーの負担軽減に肯定的な結果が得られた。さらに、マッピングの精度に関してプロトタイプ支援システムは従来法と同等以上のレベルに達していることが示された。一方、実用化には注記の素早い入力や修正等が必要であり、多人数の認知症者を観察対象とする場合の同時マッピングには課題が残された。
3. 項目2で残された課題に対策を講じてDCM支援システムを拡張した。熟練のマッパーを厳選して、実際の認知症ケア現場で信頼性の高いマッピングデータを従来法および支援システムを用いて取得した。それらの結果を、IRR(評価者間信頼性)一致率を用いて比較することにより評価し、提案手法の実用性を示した。

以上要するに、本論文はパーソン・センタードな認知症支援あるいはケアを実現するために有用な知見を与えたものであり、その成果は学術上、實際上寄与するところが少なくない。よって、本論文は博士(工学)の学位論文として価値あるものと認める。また、令和2年2月18日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行って、申請者が博士後期課程学位取得基準を満たしていることを確認し、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、論文内の一部に関して論文掲載が完了するまで、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。